



核データ国際会議の感想

1. ND2001 と私

九州大学総合理工学研究院

池内 丈人

ikeuchi@aees.kyushu-u.ac.jp

去る 2001 年 10 月 7 日から 12 日にかけて開催された、ND2001 に参加した感想などを書かせていただく事にする。この会議は、私にとって初めての本格的な国際会議であった。私はポスターセッションでの発表をすることになっており、10 月 7 日に、掲示すべきポスターと共につくばへと乗り込んだ。この日は“Welcome Cocktail”が予定されており、その 1 時間程前に会場の「エポカルつくば」に到着し、登録を済ませた。恥ずかしい話であるが、登録の際に ND2001 特製の鞆を受け取った瞬間が、ミーハーな私にとって感動のひとつであったのは言うまでもない。“Welcome Cocktail”では、会場で出会った他研究室の友人 2 人と談笑しながら、楽しい時間を過ごした。

10 月 8 日。いよいよ開会である。私にとってこの ND2001 は、自分の研究発表やさまざまな情報交換の場であるだけでなく、英語でのコミュニケーション力を鍛錬する場でもあった。“Opening talks”を皮切りに、“Keynote talks”が行われていく。私はリスニング力に磨きをかけるべく、感度を最大にして講演に耳を傾けていた。ここで気付いたことがあるのだが、今回の会議では様々なプレゼンテーション方法にも触れることが出来る。Opening Session では、M.Smith 氏による発表が、プレゼンテーションソフトを駆使されており印象的であった。その後は、この会議の参加者の集合写真の撮影をするということで、建物内にある大きな階段で写真撮影を行った。この日から、口頭・ポスター発表共に始まっており、私は様々な発表に興味深く聞いて回った。この日の夜、前日の“Welcome Cocktail”に続いて“Reception”が催されたのだが、今回は会場も広く、出された料理の種類も豊富で食べ応えがあった。中でもざるそば等の日本食は、外国からの研究者に好評のようであった。ここで私は、大学での指導教官である渡辺幸信助教授から、TSL で研究をされていた U.Tippawan 氏を紹介して頂いた。私が行っている研究は、TSL で行われた実験などを参考にしているので、今後の情報交換のためにも有益な出会いとなったし、なにより英語で会話することができて嬉しかった。

9 日。この日は友人が口頭発表をすることになっていたもので、それを聞きに行くことにした。友人の研究に対して様々な質問がされていたが、答えるのに苦労している友人を

見ていて、英語での質疑応答の難しさをひしひしと感じ、また自分がポスター発表でよかったと素直に思った。

10日は、核データ評価に関する発表が目白押しであったので、この日ポスター発表をする予定だった友人のポスター貼りの手伝いをしてからすぐに会場へと向かった。予定されていた発表の中で特に私が興味を持っていたのは、QMDに関する仁井田氏の発表と、GEMに関する降旗氏の発表であった。仁井田氏の発表では、自分のQMDに関する知識の補強をすることができ、降旗氏の発表では私がこれから取り組もうとしているGEMに関して大変よく理解することが出来た。しかも発表者が自分と同じ日本人であるからなのかも知れないが、お二人の英語はとても聞き取りやすく、研究面と語学面の両方で大きな収穫となった。午後に予定されていたM.Chadwick氏の発表は、氏の欠席のために代理の方が発表されており、Chadwick氏が話されるのを楽しみにしていた私にとっては、少し残念な出来事であった。

11日、いよいよ私の発表の日がやってきた。朝一番にポスター貼りを済ませてから口頭発表の会場に入っていたが、自分の発表のことが気になってしょうがなかった。いざポスターセッションの時間となり、様々な人々が私のポスターを眺めては、「ちょっと説明してくれ」とか「この計算値は本当に信頼できるのか」などといった質問を投げかけてこられた。私は自分の英語力のなさを痛感しつつも、



なんとか対応していた。そうこうしているうちに、私が実験値を引用していたTSLの実験グループの方々がやってきて、実験データが得られた時の様子などを話してくださった。また、N.Olsson氏にもお会いすることが出来た。

この日は“Banquet”が開催された。普段はあまりお目にかかることが出来ないような料理がテーブルに出されてゆき、私はそれらに舌鼓を打った。私と友人が座ったテーブルには韓国の研究者の方も同席しており、今年開催されるサッカーのワールドカップに関する話題などで盛り上がった。

12日。ND2001最終日である。最後のセッションが午前中いっぱい開かれた。私が聞いていたセッションで興味をひかれた発表は、CERNの研究者が発表したもので、パワーポイントに加えてムービーを駆使し、内容だけでなく視覚的にも訴えるものがあった。やがて午後となり、ついに“Closing Session”となった。始まる前は、このような長期間の会議に果たして着いていけるのかどうか不安であったが、終わってみるとあっけないものである。“Summary talks”を聞きながらそう思っていた。

今春、私は企業に就職することが決まっている。今回のND2001で経験し、そして獲

得したことを生かしながら、社会の荒波にもまれていきたい。

2. ND2001 に参加して

東北大学サイクロトロン・ラジオアイソトープセンター

三浦 孝子

takako@cyric.tohoku.ac.jp

ND2001 は、私にとって筑波での遮蔽国際会議、ピサでの中性子スペクトロスコピーに関する会議などに続く 4 回目の国際会議でしたが、日曜日のカクテルパーティーを含めてほぼ 1 週間という長い期間にわたる学会は今回が初めてでした。また、核データ研究会や日本原子力学会の核データのセッションなど国内における核データ関連の会議の場合、それほど参加者が多いという印象はなかったのですが、ND2001 では参加者の多さに驚きました。それにもかかわらず、会議期間中人が減ることもなく活発な発表が行われたことは、会場の立地条件がよかった（行くところがない？）ことにもよると思いますが、何より会議が内容的に充実していたからだと思います。トピックスも実に多様で、核データが原子炉の核設計や加速器施設の遮蔽設計はもちろんのこと、天体物理学や環境、医学診断、治療など様々な分野の発展に重要であることを再認識することができました。また、自分の発表の際も、かなり突っ込んだ質問やコメントなどがあり、国際会議の良さを改めて感じました。ただ、3 会場並列と言うのは会場の行き来に忙しく、時々聞きそびれたりするなど残念な点もありました。

会議では、液晶プロジェクターを用いたオーラルの発表で、3D の動画などを取り入れることで、非常に興味を惹く発表があったことが印象に残っており、刺激になりました。英語力のさほど無い私にとっては、OHP での静的な発表に比べれば、プロジェクターを用いた発表の方が格段に心に残っているようです。プロジェクターの使用は、煩雑な面はありますがその表現力は豊かであるため、今後次第に増加していくのではないかと思います。

それと対照的になりますが、ポスターセッションで、きれいで立派なポスターに混じって、非常に貧弱なポスターがあったことも記憶に残っています。何か事情があったのかも知れませんが、大きなスペースに A4 で 4 枚のみというのは驚きで、以前に参加したピサの会議などでは、比較的立派なポスターばかりであったため、今回見られた質の低いポスターには驚きました。また、発表件数が多かったためか、ポスターセッションの終わり頃にはかなり疲れを感じ、ポスターセッションの時間が多少長すぎるような気もしました。

いずれにしても、会議が滞りなくスムーズに進められたおかげで、内容的に得ることの多い会議であったと思います。